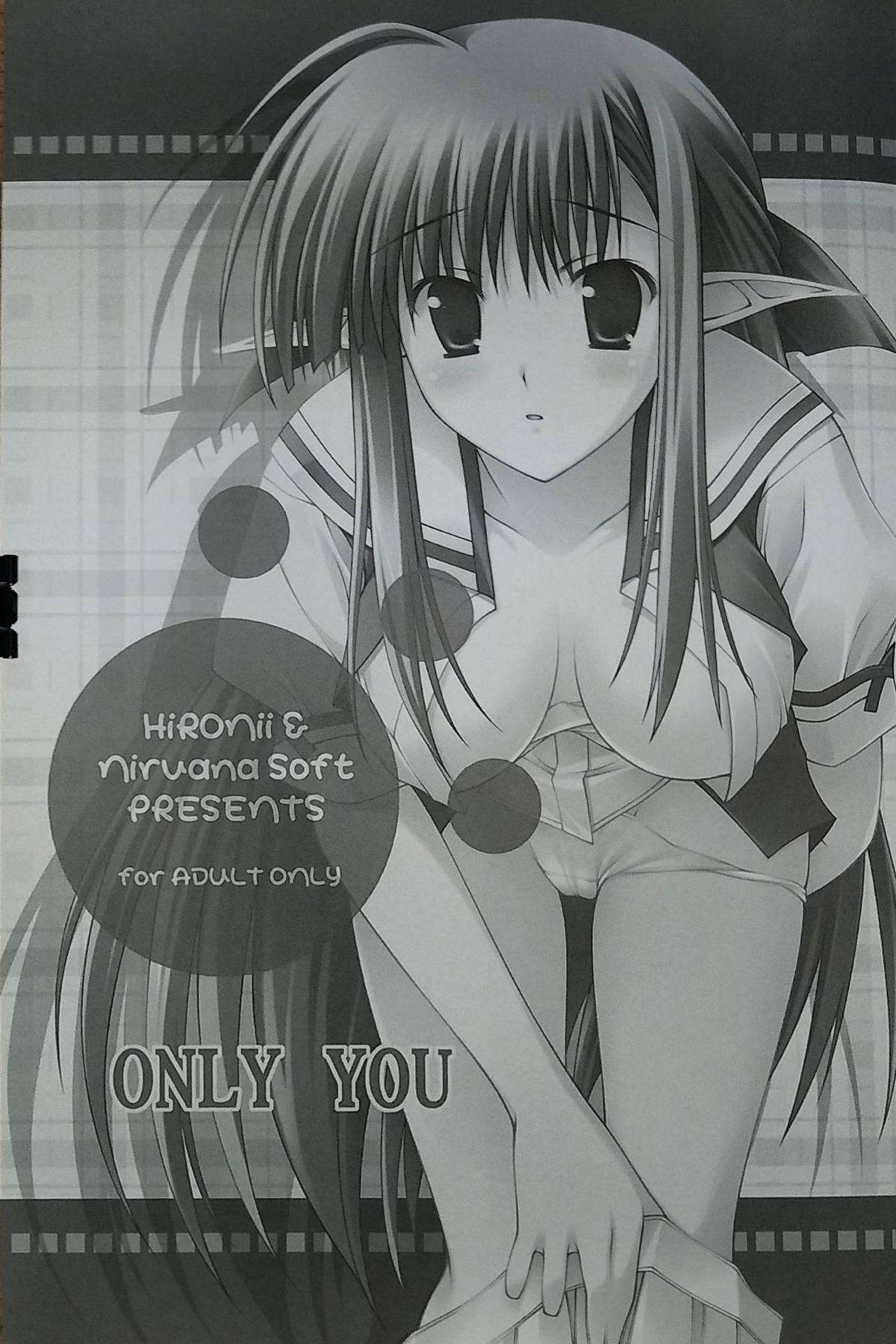




ONLY YOU



HIRONII &
NIRVANA SOFT
PRESENTS

FOR ADULT ONLY

ONLY YOU

18歳未満の方の購読を禁じます。

INDEX

- マンガ1 ... 06
- ショートストーリー ... 13
- マンガ2 ... 17





シアには悪いんだけど
今日学校でネリネの
ブルマ姿みたら、

どうしてもネリネと
シたくなつてさ…



今日はシアちゃん
の日なのに…

それなのに稟さまに
抱いて頂けるなんて…
きつとシアちゃんに恨まれて
しまいます…



ネリネが嫌なら
おとなしく
帰るけど…

んっ

そんな…

稟さまに求められて
私が拒めるわけ
ないじゃないですか！



り、稟さまあ…

ぞ、そこつ…
そこが気持ち
イイですう

じゅんじゅん

もつとつ
もつとべろべろ
してくたせー

じゅんじゅん



あ、ああ…
稟…さまあ…

稟さまの舌が…
オ…オマンコの奥まで
届いて…ますう



り、稟さま…

私にも稟さまの
オ…オチンチンに
ご奉仕させて
ください…

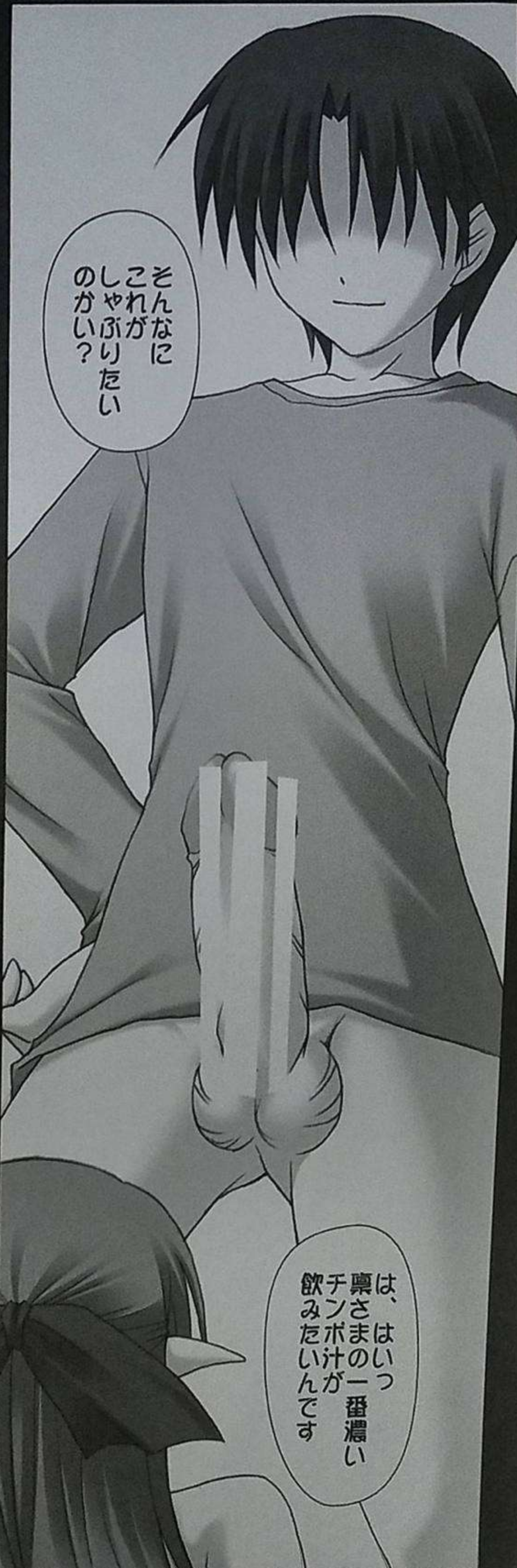


んっ

いくら飲んでも
キリがない

んっ

ネリネの
いやらしい汁が
止まらないよ



そんなに
これが
しゃぶり
たいの
かい？

は、はい
一番濃い
薬汁が
飲みたい
んです



ああっ…
いいよ、
ネリネ
もつと舌を
絡めて

んっ

んっ

そう…
割れ目を
ほじるよう
に…



り…ん…ひや
まあ…

は…やく…んっ
んあ…ら…ひ…てえ…
ろ…まへ…て…
ふ…ら…はい…

んっ

じゅぎゅっ

じゅぎゅっ

うっ…
ちよつと早
いけど
今日最初
の一番濃
いのを
飲ませ
てやる



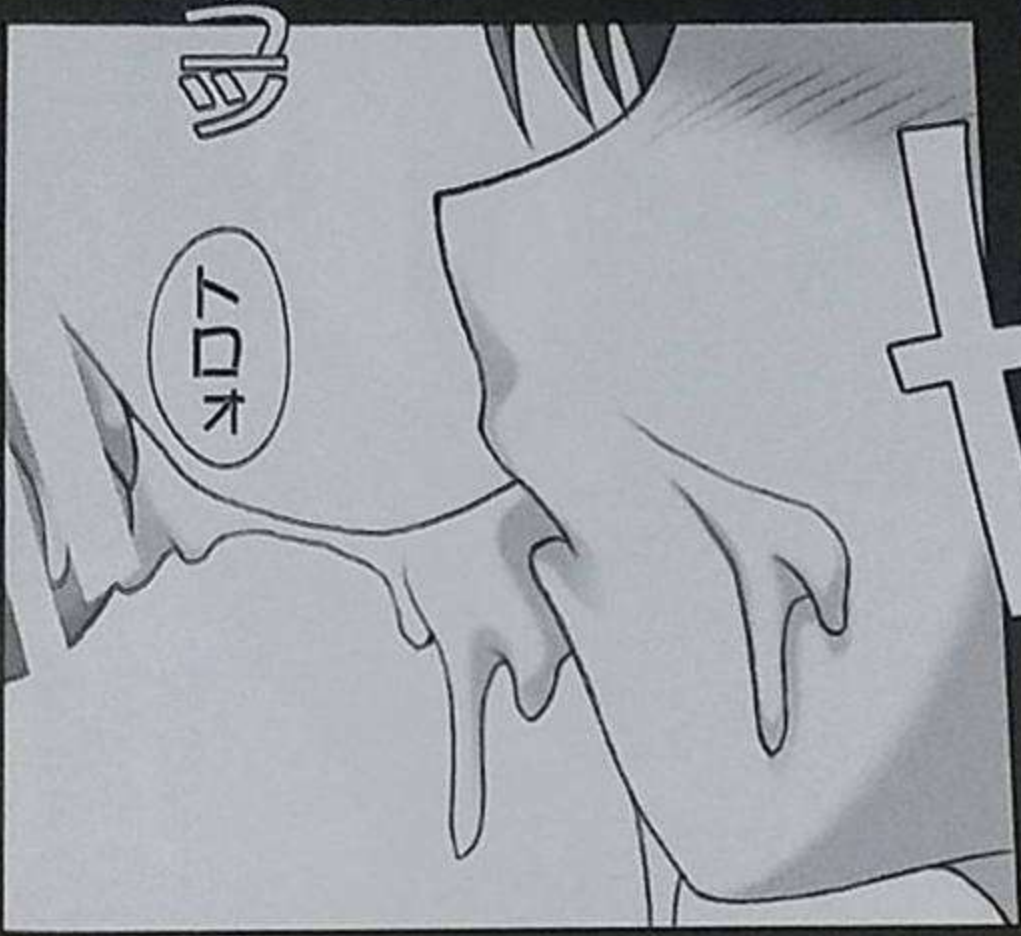
びゅん

んん
くっくっ
...



んん
んん

んん
んん
...



んん

んん



こぼさずに
飲み込むんだと

...



んん

あふう...
稟さまの...おいしいミルク...
頂いちゃいましたあ...



今度はネリネの子宮に
出したいけど、いいか？

はい...いいはい
はい...いいはい
はい...いいはい



やっぱり...

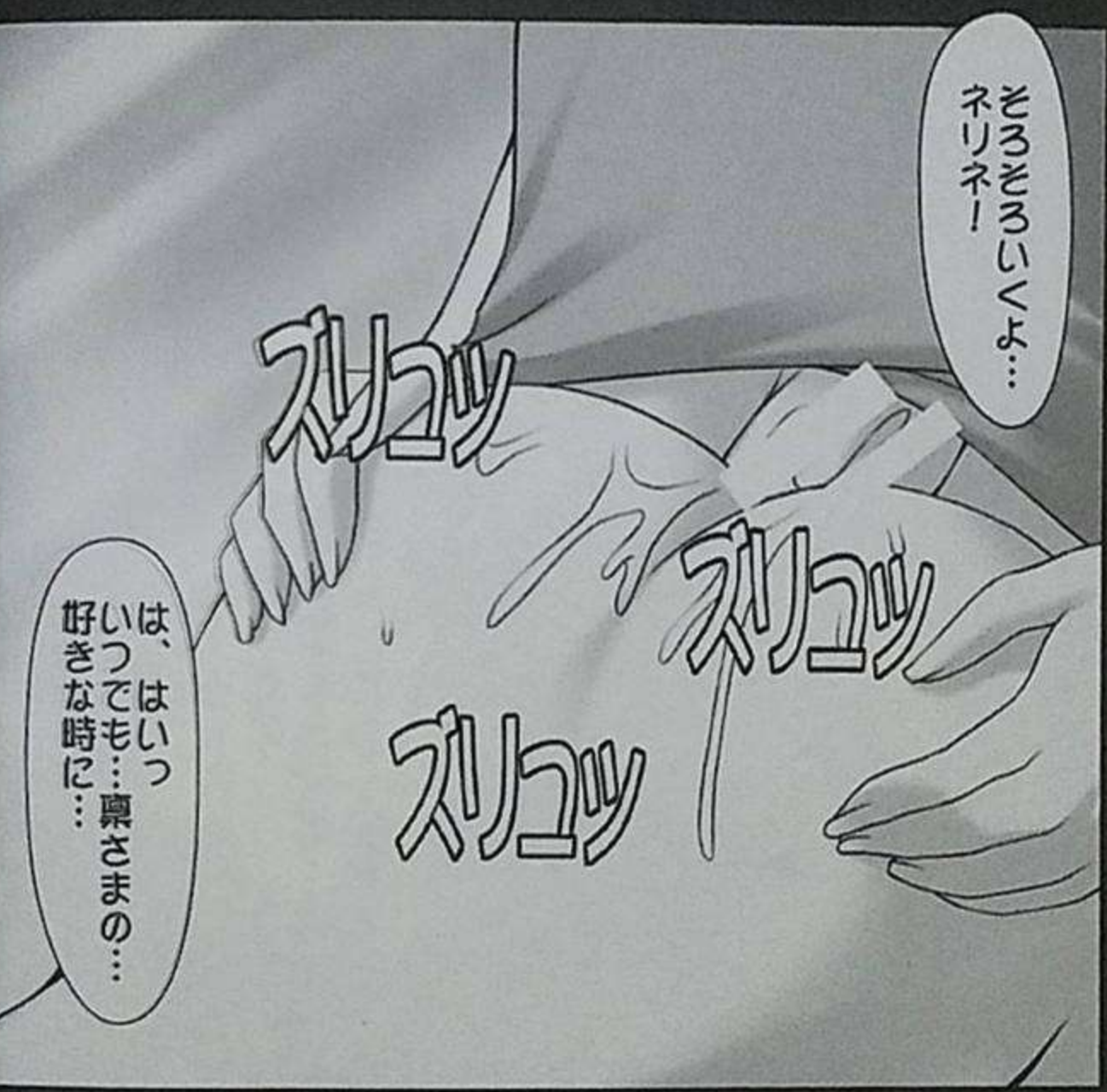
稟くん：
リンちゃんみたい
おしとやかな娘が
好き...なのかなあ...



うう...

今日は私と
エッチする日
なのに...

稟くんたら
最近リンちゃん
は最近がわりと



ぎゅぎゅぎゅ...
ネリネ!

ツキツキ
ツキツキ
ツキツキ

は、はいっ
いつでも...稟さまの...
好きな時に...



私だって...

はあ...
はあ...

はあ...
はあ...

稟くんにいっぱい
中出しされたいのに...



私もっ!

いんじゅ……うん……
いんじゅ……うん……

……うん

ザクザク

ザクザク

あの……気持ち悪かった
……ですか?

はあ……
はあ……

俺くん
出ましたね……

ああ……
最高に良かったよ
ネリネ

はあ……
はあ……

嬉しいです……
稟さま



稟くん……

どついたら
もつと私のこと
見てくれるの?



私だつて
なんだつて
させてあげる

どんなことだつて
してあげるのに……



土見稟に思いを寄せる女の子達が結成したラブラブプリン団。

そして、土見 稟を守るリンリンガーディアンズ。

その黒幕である神王と魔王の二人により、最新の技術で作られた数々の傑作作品で武装された女の子達とそれに巻き込まれた緑葉樹。初戦の勝利に沸く彼女達を待ち受けるものは何か……?

この前の戦い……というか、結局は内輪揉め……になるのか?

最後は各親衛隊同士で相当やりあってたからな。

まあ、そんなんがいろいろとあって多少は追い回される事も

無くなって来たんだが……。

掲示板に張られた記事にはこの前の大騒動と共に気になる事が書いてあった。

『ピンクは誰だ……?』

大きく書かれたこの見出しと写真に興味を持つ男子が数多くいた。

「此処まで大きくなるものかね……」

そう言つて腕組をしてうんうん頷く緑葉がいた。

「だよなあ……」

そのピンク本人を目の前にして言うのはなんだが……。

「こりや下手するとピンクに親衛隊が出来るかもな」

「そうよね」

俺の背後からにやけた麻弓が緑葉を肘で突付いていた。

「はあ……、ただでさえ気が重いつて言うのに……」

「そこはなるようにしかならないわよ」

「俺からは頑張れとしか言えないけどな」

「人事みたいに言うな。俺様の苦勞を知らないくせに……」

「そこは頑張つてよね。他は全員、女の子な訳だしさ」

「いざとなれば……」

「そうそう」

「麻弓以外は……、俺が守る」

「何で私は外れるのよ」

「いらなと思うから」

「それは何でかしら……?」

「その胸によく聞いてみるが良い。なあ、稟」

「いや、俺に答えを求められても……」

「はいはい。分かりました。緑葉に聞いたのがそもそも

間違いつて事よね」

そう言つて肩をすくめる。

「……で、どうかしたのか、麻弓?」

「そうそう。今日、放課後に楓の家に集まるように……」

「俺様もか?」

「当たり前でしょ。何でも新装備が出来たらしいわよ」

「ほう……」

「じゃあ、そういう訳でね」

麻弓が片手を上げて去っていく。

「そういや、あの装備つて叔父さん達が作つてるんだろ」

「ああ。外部からの衝撃を完全に吸収するスーツに加えて、

魔法などの物理的以外のものまで無効化するんだと」

「それだと治癒関係も駄目つて事か?」

「いや、同じスーツを着たカレハ先輩の治癒は効くように

されているらしいけど……」

「なるほどな」

「まあ、そこまでのものなら怪我する心配もないとは思うんだけど、

一応はつて事じゃないか」

「なあ、緑葉……」

「何だい、稟?」

「この写真に思うことが一つだけあるんだが……」

「ピンクがどうこうつてのなら聞かないぞ」

「いや、このブラックはどう見てもおかしくないか?」

麻弓にしては何かがおかしい。

胸がでかすぎる……つていうより、このプロポーションは麻弓には

ありえないと思う。

「ああ。それはな……、俺様は別として、麻弓はばれたら集中砲火を

喰らう可能性がある訳だ」

それはそうだろうが……。

「えつと……」

「その構成の殆どが学園の美少女揃い。その上、親衛隊のある

「三大美女に加えて、隠れファンの多い面子だからな」

「…で？」

「麻弓に関してはなるべくばれないように、外見を変える事で攪乱しようということだな」

「なるほど…」

「まあ、麻弓に何かあれば俺様が何とかするしかないだろうけどな。あれでも一応は女の子な訳だしな」

「樹…」

「それにこう言っちゃなんだが…」

「何だよ」

「親衛隊の連中も本当に稟の事をどうこうする気はないと思うぞ。それはどうだか…」

「実際に稟が死ぬような事があればどうなる？」

「えっ…？」

「女の子達から恨まれるのは目に見えてるだろ」

「まあ…」

「多少の怪我なら治癒でも掛けてもらえばどうとでもなる」

「それはそうだが…」

「それに稟をどうこうした輩は絶対的権力者二人を敵に回す事になるんだぞ」

「あつ…」

頭の中で怒りに燃えたぎった二人の姿が容易に想像できた。

「だからこそ、連中の息抜きくらいには付き合っつてやらんとな」

「それで追い回される身にもなれ」

「稟は羨ましいくらいに幸せものだからね。多少のやつかみくらいは進んで受けるべきだろ」

「樹…」

「俺様もその恩恵を分けてもらいたいくらいだね」

「樹が苦笑いの微笑を浮かべたその時…」

「見つけたぞ、土見 稟…！」

「今日こそは貴様を倒す…！」

「親衛隊の面々だった」

「ここは逃げますかね」

「そうだな」

俺と樹はその場を駆け出す。

俺達二人を追い掛けてくる面々の中でおかしな会話がなされている事に気付く。

「なあ、樹…」

「何だ？」

「おかしくないか、連中の様子…」

「一定の距離を保って追ってくる…？って事は何らかの罠か？」

「それはわからない…が、取りあえず、そこを曲がったところで…」

階段を下りて曲がり、無人の教室へと駆け込む。

「それじゃあ、いくか…。変身…つと」

「樹…」

「何だ？」

声が女の子のものへと変わっていた。

「変身する意味…って言うか、お前まで逃げ回る意味…であるのか？」

「いや、でも、こうしないと後で他の面子からの視線が痛いんだ」

「そうなのか？」

「ああ。それにどうせなら、この姿の方が好き放題できるしな」

「なるほど…」

「じゃあ、行くぞ」

「ああ」

俺達は教室を飛び出した。

「いたぞ、こつちだ」

すぐに見つかってしまう。

「くつ…、他の面々はどうした…！」

「じきに来るだろうが…って…！」

別の所で何らかの爆発らしき衝撃が至るところ起る。

「どうやら足止めされてるみたいだな…」

「シア達がか…」

「ああ。連中、数だけはいからな」

「取りあえずは追いかけて…だな」

「ああ。俺様は大丈夫だけど、稟は平気か？」

「これでも男だしな…って言うか、その格好で俺様はどうなんだ？」

「そうそう」

背後からブラックと麻弓が顔を出す。

「だから……、えいっ……」

「麻弓……、あんたはまた……」

樹の口調までもが女の子となる。

「まあまあ……」

分かれ道に差し掛かると……。

「稟、お前は向こうへ行け。それと麻弓も稟へついて行け」

「分かったわ」

「樹、お前は……」

「取りあえず、他の面子と合流しやすいうようにしなくちゃな……」

そして、俺達とは別の方向へ走り去るピンクと樹。

「俺達はこっちだ、麻弓」

「えっ、ええ」

だが、しかし……。

俺達を追ってくる男は一人もいなかった。

それどころか……。

「土見、今日ばかりはお前に礼を言うぜ」

「お疲れ様、土見」

そう言っただけで俺に頭を下げてくる男子が少なからずいる。

「どういう事だ？」

「さあ……って、もしかして……」

「何だ？」

「いや、ピンクの正体を知りたがってる連中が沢山いるとか聞いてたけど……、まさか……」

「そうなんですよ」

その肯定の言葉に振り向くと楓とプリムラがいた。

「稟、無事で何より……」

「どういう事なんだ、楓……？」

「今回の目的は稟君じゃなくて、ピンクらしいんです」

「なるほど……、それで他の面子には陽動を仕掛けてたって訳か……」

「そうみたいです……」

「ピンクの正体って言うんなら、私の事は……？」

麻弓がそう言っただけで、自分を指差す。

「麻弓ちゃんは声とか仕草でばればれみたいですよ」

「あらら」

それもそうか……、胸はパットとかでいくらでもなる訳だしな。

「折角、大きくしてもらったのに……」

「あ、あはは……」

「胸が大きい方が良い？」

「そりゃ、大きい胸にはあこがれるものよ、男の子はね」

「稟もそうなのか？」

プリムラが自分の胸を見下ろし、俺に尋ねてくる。

「いや、それは人それぞれというか……、そのなんだ、えっつと……」

「稟？」

「麻弓、お前が原因なんだから、何とか言え」

麻弓に救援を求めろ。

こいつなら貧乳には貧乳なりのステータスがとか言っただけで、

力説してくれるに違いない。

だが、麻弓は自分の胸を突付いて落ち込んでいた。

「その上、質感とかも同じにしてもらったのに……」

「そんな事よりも今は緑葉君の事を……」

「大丈夫なんじゃない、あいつならさ」

「稟が無事ならそれで良い……」

「それもそうですね」

一応、緑葉も仲間のはずなんだが……。

「でも、まあ、助けにくらいは行きますかね」

麻弓が変身を解いてやれやれという感じで歩き出す。

「で、ですね」

楓、プリムラが続けて変身を解く。

「ピンク、無事だと良いけど……」

「大丈夫……、あれでも一応、中身は男……」

楓の言葉にそう返したプリムラも歩き出す。

ピンクを追い掛け回していた男連中が資料室の前で溢れ返っていた。

「何だ、これは……」

「どうやらピンクがこの中に逃げ込んだみたいなんですよ」

説明をしてくれたのはシアだった。

「シア、無事だったんだな」

「もちろん。リンちゃんや亜沙先輩達もほらっ」

シアが指差す方には興味津々といった感じの面々がいた。そして、資料室の扉が中から開いていく。静寂に包まれながら、姿を現す樹。

「な、何だよ、これは……」

「緑葉、この中に女子はいなかったか？」

「へっ、女子？」

「ピンクのスーツを着た女子が中に……」

「それなら、窓から飛び出していったけど……」

「なんだと……！ 折角、閉じ込めたと思っただのに……」

「顔は、顔は見たのか？」

「さあ？ 何かヘルメット着けてたし……」

「失敗かあ……」

「まあ、次があるさ……」

男子全員が肩を落として去っていく。

「何だかなあ……」

樹がぼりぼりと頭を掻いている。

「まあ、無事って事で何よりだ」

「だね。緑葉君、任務完了だね」

「お疲れ様」

樹がシアや亜沙先輩達から慰労の意味で肩を叩かれていた。

「今回の連中の目的はピンクの正体だったって訳だ」

「だな。頑張れよ、樹」

「なるようにしかならないと思うがやるだけはやってやるよ」

「ああ。頼んだからな」

「任せておけ。稟の事も女の子達の事もな」

樹が片目を瞑り、自分の胸をドンと叩いた。

そんな樹と笑いあいながらシアや楓達の後に続いた。

家に帰ると待つてましたとばかりに黒幕二人が笑顔で待ち構えていた。

「今日も大暴れだったんだって」

「ええ、まあ……」

「若いつてのは良いなあ、まー坊」

「そうだね。神ちゃん。私達ももう少し若ければねえ……」

「お父さん達は司令官みたいなものなんだから、デーんと

構えてれば良いの……」

「そうは言われてもなあ……」

「退屈だよ」

つまらなそうにそう呟かれても困るのだが……

「今回は学校の中での事なので、お二人は……」

「そうそう」

ネリネの言葉にシアが「こそとばかりにうんうん頷く。

「今回はやはり仕方ないな。そろそろやるか、まー坊」

「そうだね。じゃあ、先に用事を済ませちやおうかな」

そう言っって新しい装備品の数々について説明を始める二人。

攻撃力がほぼゼロに近い楓には……などと各人の追加装備に対しての説明をしていた。

「どうかしたか、稟……？」

「いや、みんな楽しそうだなって思っただけさ」

「そうだな。少なくとも自分が好きな人を守れるって言うのが嬉しいんだろうな」

「そういうものなのか……？」

「そういうものよ。特に楓なんかはね」

麻弓が間に入ってくる。

「楓の場合、土見君に対しての負い目もある訳だしね」

「負い目ってな……」

「楓は清算しきれてるって考えてないからね」

「そう……かもな」

「まあ、土見君は素直に守られてれば良いのよ」

「それなら、稟がスーツを着ればそれで済む話とも思うんだが……」

「駄目駄目。それじゃ、楓達のストレスが発散されないもの」

「ストレスねえ……」

笑顔で話し合ってる楓やシア達を見回す。

「まあ、現状はこれが一番って事かね」

「そうそう。みんなが満足してるんだから、これで良いのよ」

まあ、今はそう思うしかない……か。

「稟殿、これからもシア達の事を頼んだからな」

「みんなを幸せにしないとね、稟ちゃん」

そう言っってくる黒幕二人の言葉に笑顔を返す事しか出来なかった。



ねえ…
ネリネちゃん



ネリネ…

んう

んう

きゅんきゅん
ヤバイ…



半分私にも
飲ませてくれない
かな？



真さまの…
美味しい

はああ…

んんうー

極楽…



だ…駄目…
で…ぶ…ぶう…

うっ、
出る…

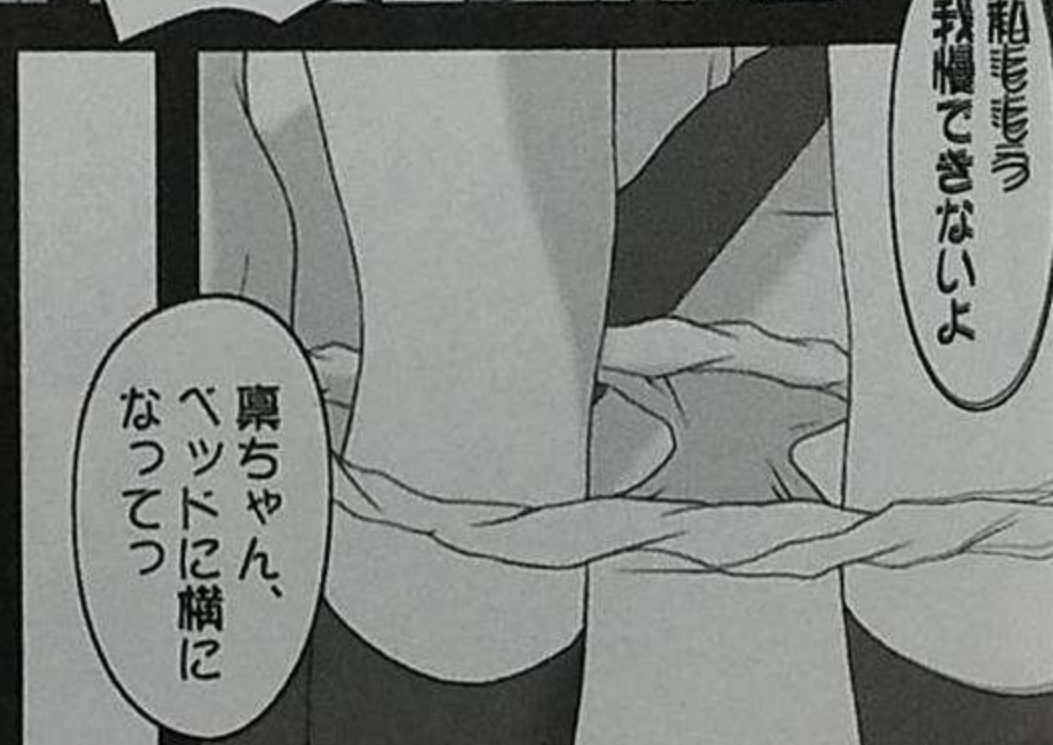
ひん…さま…のは
全部…ん、
わた…ひ…の…
も…の…んんう



んんう

あぁ…う

…気持ちいいよ
真ちゃん



私さま
我慢できないう

真ちゃん、
ベッドに横に
なっつ



次は私の番
ですよ

稟くんっ



……

いっ……

あ……

……



りみちゃんと
亜沙先輩の隙内に
あんなに出したん
ですから

あ……
あ……

私の中には
それ以上に出して
くださいねっ

……

……
……



……

……

……

……



それまで
許して
あげませ
んから
ね!

い……
い……

……

……



はああっ

お兄さんの顔が
あつたがあい

んっ

真さんなら...
まだごんなに
たぐさん



真さん

私達二人に
いつばいかけて
ください



お兄さん...
早くツボミのオマ○
にオチ○チン入れて
くださいよ

ツボミちゃんより
私のほうに先に
お願いしますう

にちや
ねちや

にちや
くちや



もっしー

なんていつも
私ばつが
のけものに
するのよっ!

今から明日まで
私が真くんを
独占するからねっ!

最低十回は
するんだからっ

い、いや...シア...
俺を殺す気か?





■あとがき■

こんにちは～。ひろにいです。
本を手にとってくださりありがとうございます！

今回は2冊目のネリネ本になりました。
ちょっとシアに可哀そうな役をやって
もらってしまい、申し訳なく思ってます。
一番好きなヒロインと一番好みから遠いヒロイン
なものでどうしてもこんな内容に…

さてさて、春のアニメですがマクロス
フロンティア激ハマリ中です。
初代TVシリーズと愛おぼえていますか以来
久々にハマれそうなマクロスで嬉しいですね。
あとは我が家のお稲荷さんの巫女のさんキャラ
のユウが気に入りました。
もしかしたら夏コミケはそれらで
本を作るかもです～。

それではまた機会がありましたら
お会いいたしましょう～！！



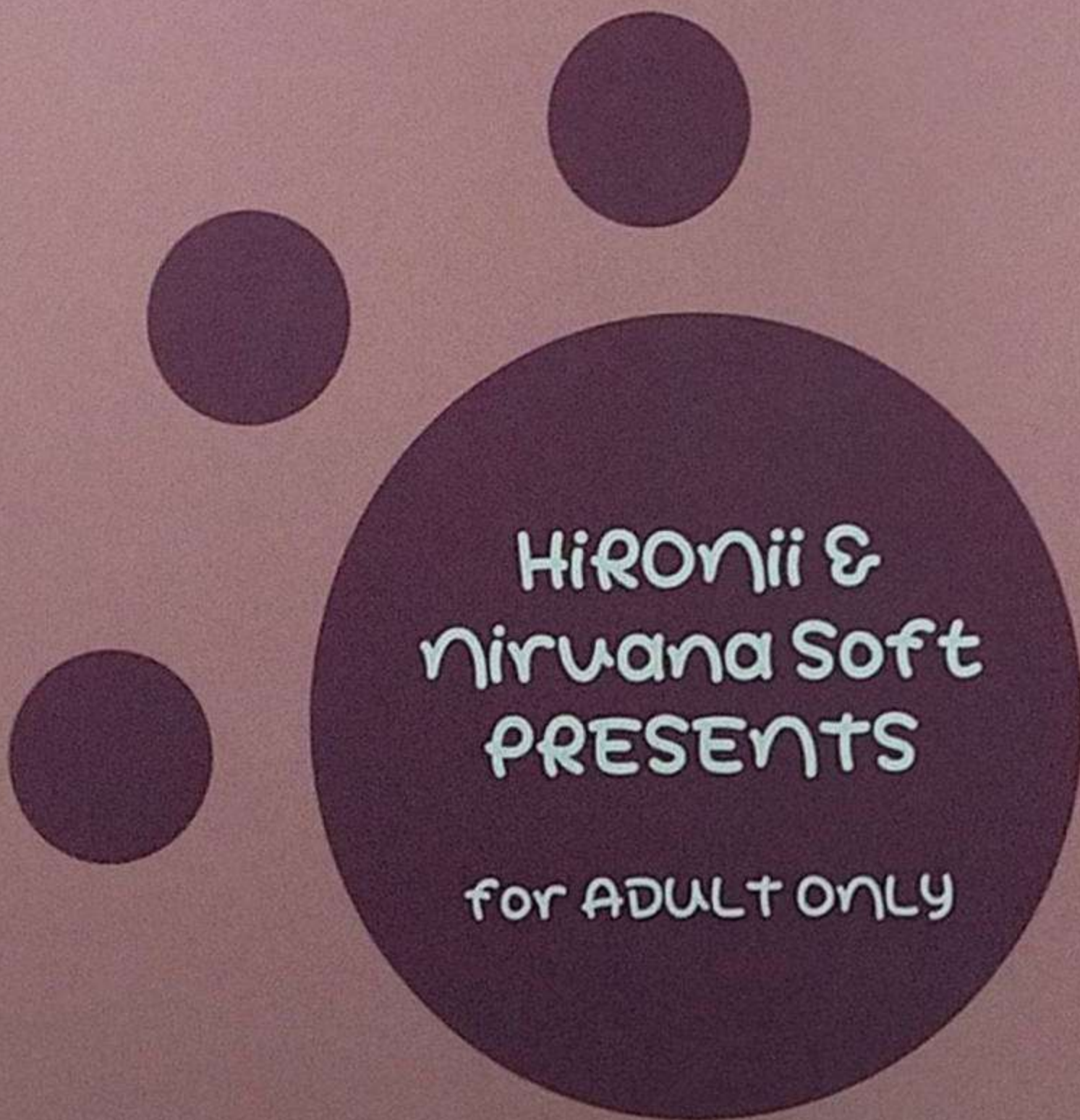
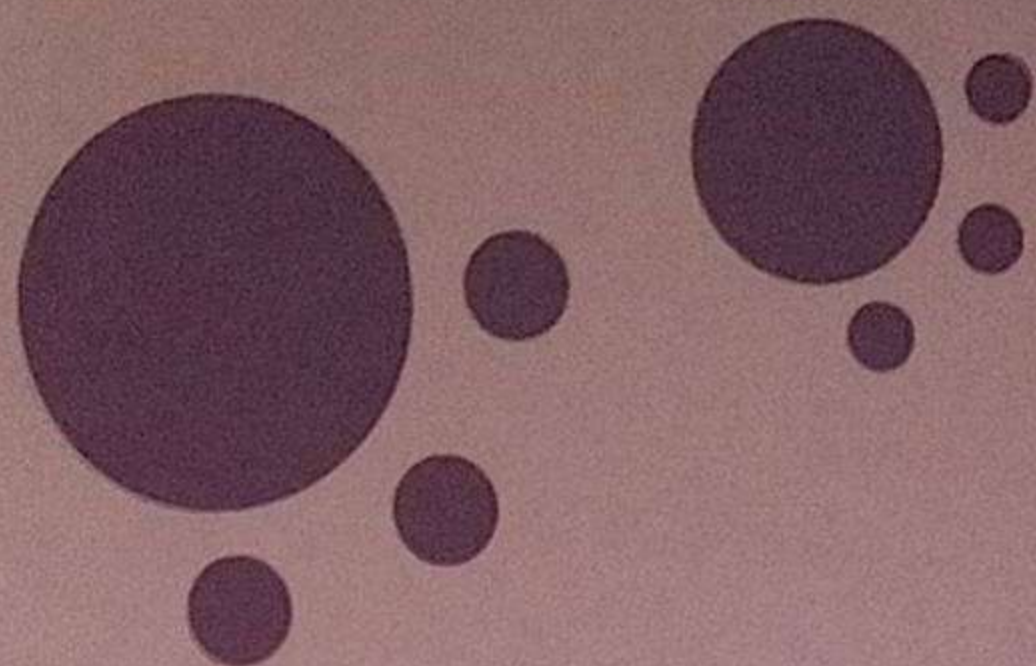
ONLY YOU

■ 発行者 : HIRONII&Nirvana Soft

<http://home.att.ne.jp/blue/hironi/nirvana/>
hironi@tkd.att.ne.jp

■ 発行日 : 2008.4.27

■ 印刷所 : 緑陽社様



HIRONII &
NIRVANA SOFT
PRESENTS

FOR ADULT ONLY

